アイヌ文學

金田一京助

PL
495
.5
K5

Kindaichi, Kyosuke
Ainu bungaku

East Asia

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

岩波講座　日本文學

アイヌ文學

金田一京助

岩波書店

アイヌ文學

金田一京助

PL
495
.5
K5

目次

緒論　アイヌ文學發見の歴史……三
滅び行く原始文學の現狀……八
最近發見の「小傳」……一二
『小傳、西浦の神』梗概……一三
第一段——第二段——第三段——第四段——第五段——
第六段——第七段——第八段——第九段
結論　アイヌ文學と「小傳」……三五

LIBRARY
SEP 29 1970
UNIVERSITY OF ALBERTA

緒　論　アイヌ文學發見の歴史

アイヌ種族の部落生活の裏に、何時の代からとも知れず蓄積されてゐる數多き口頭の詞章は、最近やうやく其の一小部分が始めて文字に寫されるまで、幾世紀、たゞ部落の古老の、口から口へ、受け繼ぎ、語り繼ぎて流傳してゐたのである。――書契以前の代には、何處の民族も曾て一度はさうであつた樣に。

初めてかういふものゝ蝦夷に存する消息を吾等に傳へた最古の文獻は、寶永六（西紀一七〇九）年の松宮觀山の蝦夷談筆記（一本『蝦夷談話記』或は『蝦夷の記』『蝦夷記』）である。『蝦夷人、義經の事をウキクルミとも中候云々。義經むかしは此國のハイと中所へ渡り、蝦夷の大將分の娘と馴みて蝦夷がひぞうの卷物をとりたる由を、日本の淨瑠璃の樣にかたり云々。』このウキクルミは、アイヌ傳說のヒーローで、宛も我が國近世の傳說文學の中の義經の位置を取るものであつたが爲めに、夙に蝦夷の地に入りて、このヒーローの說話に接觸する邦人は、忽ち此を我が國の義經に比定してしまつて、さては、內地の學界に、義經の蝦夷入り傳說を誘起するに至つたそのキャラクターである。正しくは、オキクルミであつて、或時はアイヌラックル又はオイナカムイ或はアエオイナ・カムイとも呼ばれる半神半人で、アイヌ神話の上の人祖であり、文化神でもある。この神の惡魔を平げ、人文の基を開いた物語歌が、幾多の詞章を構成して、宗教的聖約視せられ、且つは神聖なる歴史として生き、或は尊き詞曲として文學の用をも成して部

落に傳誦されてゐるのである。元文二（一七三七）年の坂倉源右衞門の蝦夷隨筆（同四年に、少しく變改補足して『北海隨筆』となる）に至り、『酒たけなはにおよびて歌を歌ひ、淨瑠璃をかたる。聲音は聲明を唱る聲のごとし。云云。仙臺淨瑠璃の音にてゆるりとかたりたるものなり。尤もはやめの所もありと見えて、聲音をはりせめてかたる所もあり云々』と、やゝ詳細にその外形を記述してゐる。

天明四（一七八四）年の立松東蒙の『東遊記』には、『醉ひぬれば仰ぎ寢て左右の手にて胸を打ち唄の如き物をうたふ云々』と漸くその演奏法を傳へてゐる。そして、最上德內あたりから、專ら蝦夷淨瑠璃及び蝦夷の長唄或は祭文といふ稱を用ゐ出して、以後、この名が諸家の蝦夷探檢の遊記又は聞記類に喧傳された。德內の有名な『蝦夷草紙』（寛政元年稿）に、その標本の短章が示されてゐるが、同人の匿名の著である『渡島筆記』（文化五年）の方には、一層詳しく、且つ所謂蝦夷淨瑠璃の原名ユーカリの語も見え初め、その由來の古きものであること、蝦夷の國風ともいふべきものであること、語るに節をつけてさながら我が國の幸若舞の詞の趣であること、たゞ、其辭句は難解であつて、『夷地に往來して大抵通辯なる程の者にても確かに聞きかぬる故は、此うたひものに限りて平日云ふ所と異なる言葉多しとぞ。想ふに極めて古辭雅語を專に用ふることゝ見えたり云々』と云つて、漸くその內容に入つて、更に二篇の蝦夷淨瑠璃の梗概を紹介してゐる。

其一は、大酋長の歿後、その孤兒が一人の鄕黨の手に養はれて育つてゐたが、鄕黨が故酋長の家の寶を押領しようと惡心を起こし、孤兒を己が近親の家へ、膏を乞ひに遣はし、其許で殺させんとしたのを、孤兒が覺つて遁走し、暗夜途を失つて迷ひ歩いた擧げく、兎角して行き着いたのは、偶〻父の親しくしてゐた人の家で、その娘は兼ねて、父

と父とが約束してゐた未來の妻たるべき美少女であつたのみならず、仄かに鄕人の惡計を察知し、行つて救はうと思つて果さず、本意なく過ごしてゐる所であつたので、互に大に喜んで、少年は篤くもてなされ、心盡しを受けて、及ぶ程丈度をとゝのへて故家へ送られて歸り、それより、互に讐を結びて戰鬪に及ぶものであるといふ。

其二は、余市の酋長が死して、女子一人、男子二人が育つてゐる。石狩の酋長またその家の寶に目をつけ、宴に託して孤兒等を呼び寄せ、欺いて殺さうとする。孤兒等は、萬一を慮り、謀りて、姉と兄とだけ出掛けて弟一人家に留る。果して姉と兄と、夜が明けても戻らず、危難の中に在さん、いざやとて親の代よりの太刀・弓・矢を身にとりもち、鳥よりも疾く、熊よりも猛く翔りに翔つて行つて見れば、二人は果して衆に取り込められ、散々に戰ひ、已に危き所を、自ら群がる敵を斬り伏せて二人を救ひ、最後に青年石狩人の我と同じ樣なる出で立ちをしたのと渡合ひ、相戰つて勝負がつかず、戰ひ勞れて蹶き仆れ、殆んど危い所を僅かに免れて、もはや戰を好まず、二人を助けて我が家へ歸り、尙石狩人の來寇に備へてゐる。愈〻石狩より鏖殺戰の襲來する知らせがあつて、兎やせん角やあらましと、三人相談をすれどもよい智慧も出でず、殆んど決死の覺悟をした時に、家に仕へてゐる老婆が、三人をすゝめてひとまづ山へ隱れしめ、一人留守居をしてゐることにする。其處へ、石狩人の偵察が二人、先づ到り見て、余市の城外、寂として戎嚴のあとかたも無いのに驚きながら、不審を懷いて城內を覗へば、當の兄弟は影も形もあらばこそ、年取つた老嫗一人、爐邊に踞んでゐるのに、その有樣、『よく〳〵見れば、眼の光は日の如く、白髮は秋の山の枯葉の上に雪の降積りたるが如し。面の皺は冬の海の白浪の幾重も立おこるが如く、口のもとの黥の殘りたるは、岸うつ波の上にさし覆ひたる出岬に夏の草木の生ひ繁りたるが如く、鼻の穴の打あきたるは、石山の洞に鹿が角振立て出入するも

やすきが如く、つく息の火焔をなすは燒山の灰をとばすかと訝からる云々。』かういふ敍述は、アイヌ文學の特異の所で正眞正錄のユーカラの地の文の忠實な紹介である。思ふに、年長けたる老婆の巫術を以て敵を畏れしめたことであつて、かくして後に、一兵を損せずに、その雄辯を以て彼我の間に婚姻を遂げしめて石狩と余市と緣者になりて曲を結ぶといふ梗概である。

然し乍、すべては飜譯の紹介に止まつてゐて、原文そのものは傳へられなかつた。それが、我が國のアイヌ語學の鼻祖であつた蝦夷通辭上原熊次郎のアイヌ語彙『もしほ草』（一版は一卷、寛政四年成稿、文化元年刊、再版は二冊、蝦夷方言藻汐草と改題、刊行年月未詳）に至つて、ユーガリ、淨瑠璃の事と題したアイヌ語のテキストが載つたのが、我が國に於ける假名書きのアイヌ文學の最初の記錄である。十三枚二百三行、約五百句ほどの本文であるが、不思議なことに、冒頭の一枚半は怪しいアイヌ語で、人稱法などは丸で無茶であつて、全く日本語流のアイヌ語である。而も、譯はこの一枚半にのみ附いてゐて、自餘の十一枚半は原語のみで譯が無い。この譯の無い部分は、北方方言で、聞きちがひ、或は書きちがひと思はれる誤は澤山あるけれども、純然たるアイヌ語で、正しくアイヌの口から音の響くまゝを假名に寫し取つたものである。短いながら一篇の筋がまとまつてゐる。

北海道廳藏の『蝦夷見聞記』十九冊は、何時何人の手に成つたものか詳かではないが、蝦夷資料としては、全然著者獨自の新しい見聞に基いたもののみで、貴い資料ではあるが、ユーカラと云つて、實は一つの實歷談（アイヌ語に之をイソイタク Iso-itak といふ）と、一つの昔話（アイヌ語に之をウェペケレ Uwepeker といふ）とを長々と載せ、アイヌ語のルビーを施して二卷に滿載してある。惜むらくは、そのアイヌ語は、アイヌの口からそのまゝ筆錄したも

のでは無く、アイヌの演出したものを、通辭について、大體その意味を聞いて邦文に書き綴つた後、此を通辭に就て再びアイヌ語に復文してルビーに添へたものである。故に、文は全然邦語の慣用句で成立ち、ルビーのアイヌ語は、文意に關することなく逐語的に、アイヌの單語をたゞ臚列してゐるに過ぎぬ全然信憑すべからざる資料である。のみならず、ユーカラと稱して、實際書いた所のものは、上述の如く、全く散文の話に過ぎないものであつて、此を以てアイヌの昔から名高き蝦夷淨瑠璃の標本であるかの如く見做されたら、飛んだ間違ひである。

かやうにして、維新前に於けるアイヌ文學の眞の記錄は殆んど無くして、僅かに彰考館所藏の、蝦夷言と題し、チャランケ並に淨瑠璃と割註をした一片の小さな寫本があるに止る。筆者・年代共に詳かならざるものではあり、且つ僅僅百五十六句の記錄に過ぎないが、正しくアイヌの口からそのまゝを筆記したもので、可なりに精確な、純粹なアイヌ文章である。譯を缺如してゐて、尻切れになつて止んでゐるのは惜しいことである。試みにその冒頭を逐語的に譯出して見るならば、『わが兄、（この次に原文今一句「わが姉」が明らかに脫落してゐる）又なき養育をしてくれて我が育つてゐた。折節、噂に聞いてゐたことは、石狩びと（石狩の酋長のこと）の、三人兄弟と、二人の妹は羂皷（註、シャマニズムのジャカウ鹿の皮を張つた片面の太皷）の加護ある畏るべき人々で、石狩ぢゆうに、その名が立つてゐると、我等はそれを聞いて暮らしてゐた。ある時、吾々を請待するたよりが來て、我が兄と、我が姉とが、家人を具して、酒宴に行つた。毎日待てども歸つて來ぬ。折節、驚くべき噂が、飛んで來た。それは、かうであつた。云々』と、石狩で石狩の人々が、兄と姉とに云ひがゝりをつけて紛爭を起こし、大勢で猛烈な戰を始めたと聞き、父祖累代の武器を身につけて救ひに赴く武勇譚に成るのであつて、辭句が簡單ではあるが、さながら、渡島筆記の一つの淨瑠

璃と同じ物語らしいのである。

明治に入つては、十五六年の交北海道屬、故永田方正氏の筆錄並びに邦譯にかゝるユーカラの一篇が、古い東洋學藝雜誌に掲げられたことがあつた。此が短いながらに、邦人の手に成る唯一のアイヌ文學の見本である。西洋人では、ジョン・バチラー師に『アイヌ民譚の標本』と題して、日本アジア協會で一八八八年と、翌八九年及び九二年の三回に發表されたものがあつて、各〻その年の會報に載つてゐる。最初の一から七にいたる七篇の歌は、所謂蝦夷の長唄（或は祭文）と呼ばれた種類のものであり、七から十までの四篇は所謂蝦夷淨瑠璃、卽ちユーカラの一段物或は二段物の小品であつた。ローマナイズされて、さすがに、發音も劃期的な精密な寫し方になつて來たことでもあり、その上、全部に英譯も添ひ、脚註も添うてゐるが、時代が早かつただけに、今日の目から見れば、第一に散文視して、全然續け書きに、フートも何も見えない取扱ひ方をされてゐたことが、誤りであつたし、第二に、全部が皆第一人稱の敍述であるのを、中には、人稱形に對する文法上の理解が足らなかつた爲めに、譯文では、人稱が區々で話說の筋が通らなかつたりなどする憾みがある。

以上が、私が此の研究に取りかゝる以前に成された業績の概觀である。

滅び行く原始文學の現狀

然し乍、アイヌの部落に流傳する大小樣々の詞曲及び物語の類は、決してこの程度に止まるものではなかつたのである。散文の昔話（ウエペケレ）（Uwepeker）でも、常の談話の語とはやゝ違つた語法で、一定の型があり、朗讀體に語られるも

のであつて、神々の昔話（Kamui uwepeker）と人間の昔話（Aiinu uwepeker）とがあり、大小長短、私の採錄しただけでも、數千語から成るもの五十餘話、筆錄し得なかつたものが百話にのぼるが、固よりまだ十の一二に過ぎないであらう。全く節附きで歌ひ出でられる詞曲（Yukar）にも、神々の詞曲（Kamui yukar）と人間の詞曲とがあり、通例此の後者が單にユーカル或はユーカラ（Yukar）と呼ばれてゐる。神々の詞曲の方は內容が信仰上の說話で、一篇一事を說く簡單な結構であり、小は二三十行の小篇から、大は數百句或は數千句にも及ぶ長篇まで、これ亦傳誦せられる總數は、概算も立たない程であるが、私の完全に筆錄したものだけでも百篇を下らない。單にユーカラと呼ばれる、人間の英雄の武勇譚を謳ふ方は、短くとも千句・二千句、長きは六千句・七千句、更に一萬句以上にも上るものがあり、往々六戰の曲、八戰の曲或は十戰の曲など云はれて、六段・八段・十段などに分れ、段物の形を取つて、幾つもの物語を含んだ、厖大な長篇があつて、之を歌ひ出づる時は、往々一篇で夜が明けてしまふのである。それ故に、本當の雄篇になると、一篇でも、演奏者の口から全部を筆錄することは、容易の業でない。爲めに、これまで口頭の傳承に任されて、忘失するがまゝ滅亡の岸を辿りつゝあつたのである。

筆者の手に筆錄を完成せられたもの、明治卅九年の夏、日高國沙流郡、平取村のカネカトクから得た「首苞・首ざかな」を始めとして、大正二年、同じ沙流郡の紫雲古津の盲人ワカルパから得た「虎杖丸の曲」「葦丸の曲」「蒭靈の曲」「八つの肉串戰物語」「川口びと戰物語」「小さな脚のある耳環の曲」「金獺記」「紅焰白焰」「惡夢の曲」以下、今日に至るまでに、凡そ題名のあるもの四十篇、無きもの四十篇に及び、猶、名のみを聞きて本文を筆錄せざるもの十數篇、たゞ演奏するのを聞いて題の詳かならざるものはその數を知らない。但しその內には、ユーカラの變種のハ

ウ・サコロベ・ヤイェラプ各〻數篇、外に樺太のハウキ十數篇を含む。

尙別に、神々の詞曲から發達して、これが英雄の詞曲を構成するに至る階梯に立つたものらしい聖傳、卽ちオイナ（Oina）と呼ばれる中間形の謠ひ物がある。此は從來殆んど知られなかつたものであるが、アイヌに於ては、その宗教上の重要な歌謠であつて、祖神オイナカムイの自ら歌ひ遺した聖訓であると信じられて、この神の戰功を內容とする長大な美しい歌曲である。此は、さう數多くあるものでは無いと云はれる。その最も神祕な長篇で、オイナカムイの神統を物語る一篇は、特に神傳（Kamui Oina）と呼ばれる。又最も雄大な日の神を巨魔の厄より奪還して世を常闇の中から再び光明界に救ひ出す一篇があつて、大傳（Poro Oina）と呼ばれてゐる。その他、神々のユーカラの內、特にオイナカムイの自敍體に述べられてゐる物語を廣くオイナと呼んでゐる地方もあつて、私の筆錄を完成したものだけでもそれらが十數篇に達してゐる。

そのほか、單に歌といはれるもの〻中には古老の演ずる酒歌（Sake-hau）や靑年男女の口癖に歌つてゐる情歌・俚謠の類もある。元來アイヌの歌には、意味の無い單なる音群を繰返し〳〵高聲に揚抑するだけのものもある。酒席で老人のやる酒歌もその類であるが、通常アイヌの俗に、「ひとつ歌へ」「歌はうよ」と云つて互に演出する所謂歌は、往々にして又やはりそれだけのものに過ぎないことがある。稱してシノッチャ（Shinotcha）といふ。「遊曲」の意味で、事實は節・曲調といふことであるが、同時にうたの意味になるのである。但し、これを反復してゐる間に偶〻心に浮ぶことがあり、その事を、詞にしてこの音群の合間々々に投げ入れて、卽興の歌のかけあひが往々期せずして實演される。この時には、この音群が宛然折返（Refrain）となり、且つ音群の曲調がその詞の曲調となつて歌が進行す

るから、意味からは詞が主で音群は形式的な無駄に過ぎないけれども、曲調の方から云へば、却つてこの音群そのものが基底になつて歌全體を動かして行つてゐる。これらの無意味な音群も、起原的には或は意味があつたかも知れない。酒歌のウェーウェーと聞こえる音は、熊の様な聲で、實際に熊の神が自敍體に物語る神謠の折返はウェーウェーである。シノッチャによく皆のやるホレーホレー、ホーレー、ホーレンナー、ホレーのやうなのは、いざ〳〵といふやうな催し立てる間投聲でもあつたかと思はれ、今一つのよくやるヤイシャマ、ネの、ヤイシャマ(Yaishama)は、「まねる」「描寫する」「表白する」といふ語であつて、歌者の心を表現する意味だつたかと思はれる。古來數多のアイヌ婦女子の悲しい境遇を表白した抒情の歌が、このヤイシャマ、ネ、ナを折返にして村々に無數に歌はれてゐる。時にはホレ、ホレと交〻綜錯して折返されることもある。兎に角、人間の歌卽ちシノッチャは、この形式で歌はれるものとなつて、到る所、個人の特質で曲調は各〻分れるが、皆この同じ音群で繰返される無數の俚謠を有してゐる。これら俚謠の採集は、今日まで餘り重きを置かれなかつた爲めに、殆んど發表された研究が無い。舊い雜誌「アイヌ研究」に、吉田巖氏が寄せた二篇のヤイシャマネは、殆んどヤイシャマネの代表的なものであつて、そして殆んど唯一の發表である。私自身には、まだ特に骨折つて此を集めようとしたことは無いが、自然に二三十篇は記錄されてゐるが、聞いて記錄しなかつたものゝ方が遙かに多いのである。

以上の內、今日まで單行書として刊行されたものには、アイヌの才女、故知里幸惠(チリユキエ)の、「アイヌ神謠集」がある。祖母の口から採集した神々のユーカラの記錄で、アイヌ自身の手に成つたアイヌ文學の唯一の文獻である。筆者の手に成るものでは、樺太のハウキの假名書きへ、對譯と脚註とを施した「北蝦夷古謠遺篇」、日高のオイナ及び神々のユー

カラをローマ字書きにして對譯と脚註を添へた「アイヌの聖典」があり、アイヌ文學の全般に亙る說明と、ユーカラの原文對譯には、又筆者の「ユーカラの研究」(二冊)がある。

最近發見の「小傳」

神々のユーカラは、神々の起原、祭祀・行事の濫觴、その他の說明說話であつて、間々美しい傳說の小品を成してゐることがあるけれど、信仰と固く結合してゐて、未必しも純然たる文藝とは見られない。その內、主神アイヌラックルの自敍體の說話であるオイナを通して發達した人間の英雄說話のユーカラに至つて、始めてアイヌの文學があらはれたのであるが、部落生活の間に於ては、勿論尙その事實は、本當に實在した歷史の如くに考へられがちで、全然創作者の空想より出た作品視されるところまでは來てゐない。それ故にユーカラの演奏者達は、どこまでも、たゞ前代の古老より傳承して演奏するまでゞあつて、自ら意識的に創作するのではない。然し乍、一語も違へじと、神々のユーカラ及びオイナを敬虔に傳承する場合とは、心理に於て多少の差があるものゝ如く、智巧あるものは布衍し、或は美しく補綴するなどいふやうな加工のあり得べきことは疑ふ餘地がない。部落の人々のユーカラ人を品隲するのを聞くに、ワカルパは言葉が丹念でソツがない、コタンピラはあつさり語つてわかりがよいなど、或は聲を以て喜ばれるもの、節を以て名あるもの、ユーカラ人にも得意が色々あることがわかる。卽ち中には簡約に演じ去るもの、委曲を盡して詳かなるもの等々の差があることを知るのである。して見れば、宗敎說話ほど拘束力が無く、それだけ個人の才幹に解放されてゐると見なければならぬ。そこに創作衝動の働く十分な餘地があり得た筈である。たゞ未開社會

に於ては個性の發達が少く、依然としてその作品は社會的・民衆的であることを脱せず、どうしても類型的である所以である。されば、ユーカラは、文藝的に進出したとはいへ、藝術的にさう高く評價され得るものではない。寧ろこの點に於ては、なまじひな個性の働かない、全く傳統的な、純宗教的な説話の方に、より大なる原始的興味を感じることである。

この意味からと、今一つには、神々のユーカラ及び、英雄のユーカラはこれまで諸書に大概を述べたから、こゝには、全く新しい發見にかゝる、神々のユーカラと英雄のユーカラとの中間階梯を爲すオイナに就て少しく新しい紹介を試みて見ようとするのである。

『小傳、西浦の神』梗概

日高地方の聖傳（オイナ）には、其中に神傳及び大傳が他の聖傳の中に特立してゐるが、膽振地方にはオイナに大傳（ポロオイナ）（Poro Oina）と小傳（ポンオイナ）（Pon Oina）が對立してゐる。この濱續き隨一の傳承者、幌別の老嫗金成モナシノウクが十年前の祭の夜に終夜これを演出するのを聞いて驚嘆したが、筆錄の機を逸して遂にそのまゝになつてしまつた。偶〻モナシノウクの長女、イメカノ刀自が之を傳へてゐる事を確め得たので、刀自がローマ字を知つてるのを幸ひ、私に代つて私の帳面へその傳承するまゝをペンで書き下して貰つた。長い間かゝつて出來上つたのを此頃讀んで見ると、大體の筋は、大正四年の夏日高の新平賀のエテアンマから筆錄した所の、オイナカムイがアンルルンカムイと僞つて里神の妹を妻訪ひし、幌尻嶽の嶽神と女を競ふ妻求（つまもと）傳説にほかならないが、巧拙・精粗同日の論ではなく、渾然たる好個の美文辭

である。アイヌ文學の代表的な名篇と推して差支がない。今迄之を精讀せずにゐたのが私に取つて遲過ぎた憾みがある。今こゝにこの一篇を梗概する所以である。

アイヌのオイナカムイは、我が國の大國主の樣に色々な妻求傳說をもつてゐる。中でもこの里神の妹を求めて得る物語は最も生彩があり、その點に於ても確かに代表的なものである。アイヌの里神といふのはコタン・コロ・カムイ（「村里を領有する神」の意）で、神々の上位に位する所謂重い神（パセカムイ）である。この神は、人界へ出現して人間の目に觸れる時には、大梟に身を現じると信じられ、アイヌは、森で大梟の聲を聞くと、里の神（コタンコロカムイ）の聲であると云つて畏れ愼む習はしがあり、嶽の神（キムンカムイ）なる熊に對すると同樣、その仔を捕獲することがあると、檻に飼養して——尤もアイヌに云はすと、養育して——成長した後に、盛んに神送りの行事を執行して祭を營むことをする。

本篇のみならず、アイヌの文學に、里神の日頃の動作を敍述して、特に、瞼をパッと閉ぢ、パッと開くと描寫するのは、梟を飼育して目擊した經驗から、この神の風貌を躍如たらしめてゐるものである。

第一段　發端、生立の條

此は全篇里神の妹神の自敍體の說話で、まづ第一段は、里の神なる我が兄神と姉神との手に我は大事に愛育せられて無事にその日を送つてゐたと語り出でる。

兄神は、いつもまぶたをパッチリ閉めてゐるが、姉神はいつも〳〵刺繡に脇目も振らず夢中になつて居、家の橫座には、神寶の黃金の行器（ほかい）や黃金の手筐がぎつしり詰まり、寶器のその光で下が明るく輝き、上の方には、本當の首領の佩く黃金造りの太刀が幾柄（つか）も幾柄も嚴めしく懸かつて、數々の房がそよ〳〵と搖れると、家の中に白雲・黑雲が湧

いて部屋の中をいつぱいに立ち罩める。晩になると、これらの寶の黄金の光や容器の蒔繪の光りが、晝の様に屋内をあかるく照らし輝いた。（中略）

姉神の手づから製した刺繍の衣が段々數重なつて、衣桁が上の桁も下の桁も撓むほどに富み、その表からは神々しい光がかゞやかに射し延へるのであつた。

我は毎日、向座に這ひずり廻つて、灰を立てゝは上座の方へとばし、下座の方へとばして、ひとり遊びをしてゐた。日が暮れると、灰の中から起き上つて姉神の肌へもぐり込む。姉神は、つく息をも私の爲めに折半し、心臓をも私の爲めに折半するばかりに私を可愛がつた。

その内に我は漸う成長した。成長するにつれて我が身からも光が射し延へ、白い靄が常にまはりを立ち罩めた。姉神が、柔い布を出して我に與へると、それを大きな袋に造り、小さな袋に造り、姉神に示すと、まあ、上手だこと、と褒めるかたはら、何やら變つた音がするのに、いぶかしく差し覗いて見ると、姉神は息を殺してくす〳〵笑つてゐる。我腹を立てゝ肩をゆすぶり、足をばた〳〵させ、はては大聲を出して、泣きわめき、泣きあばれる。すると何時でも姉神は、自分の頭を叩いて『おゝ、こんなに上手なのを、何わたしが笑ふものか。下女たちの振舞が可笑しくつてそれをわたしが笑つたのだ。泣くんではない。さあ〳〵も一つ拵へて頂戴』云ふまゝに、我はすぐに釣られて、喜んでしまひ、又別の袋に懸命にかゝつた。

もはや一人前の少女になつて、女の襯衣の紐を胸高に緊めるやうになつたら、彌増しに光を添へて來、あれほどに拙かつた縫物が、表より神雲が立ち昇り、姉神が小手打翳してすかし眺めて驚嘆する様になり、我が造るもので、上

の桁も下の桁も撓むばかりに衣桁がなつた。

兄神は、例の瞼を閉ぢて、たゞ食事の時だけ明けて居たが、ある日、パッと瞼を開いて我へ面てを上げ、にこ〳〵笑つて打ち眺め、數多たび頷いて見せて、さて云ふ樣は、『はや御身も、夫をもたずに居てはいけない。幌尻の里の護りの神は、御身とは、襁褓の上から、親と親との約束した仲で、その神の襁褓の半分に御身を育て、御身の襁褓の半分に彼の神が育てられた。又御身の耳輪を彼の神の耳に、彼の神の耳輪を御身にと、互ひにさうして育つて來た御身達である。相添うて、立派に暮らすがよい。それに又、よきひとが、永く逢はずに居ては、惡神の邪魔がはひるもので、幌尻の神が、早く御身を見たくてゐるのだから、一等先に御身を尋ねて來るであらう。來たら、若い者同志で逢ふ樣に、この家の後ろに御身のうちを造つたから、今日から其處へ行つて居るがよい。』云つて又兄神は瞼を閉ぢた。

『夫と云つて何のことであらう。立派に暮らせと云つて、どうすれば好いのであらう。今迄こんなに可愛がつて下された兄神・姉神と分れて獨り住んだら、どんなに淋しいことであらう』と、悲しさに涙がこぼれた。姉神の云はれるには、『我が妹、泣くんではない。別の家と云つても遠くはない。御身に逢ひたくなつたら、いつでもすぐ行くから泣くことは無い。さあお出で』いはれて、『今迄、兄神・姉神のお蔭で姫と育つて來たのに、旨に叛いては罰があたるであらう』さう思つたから起ち上つた。姉神に手を取られて外へ立ち出でる。見ると、小高き丘の頂に、黄金の家に黄金の垣根を取廻した立派な我が家の後ろに、屋のむねをぴんと跳ねた、家の腰のきゆつと緊まつたさゝやかな善い家があり、そこから煙が立昇つてゐた。軒下に入り、簀を垂らした戸口をするりと入つて中を見ると、驚くべし、ささやかな家の内部は程よき實、程よき家具ですつかり飾られてあり、黄金の床がなめらかに敷き設けられて好ましと

も好ましい。爐には焚火も燃えてゐる。姉神が本座に我を坐らせて、何くれと我をさとし訓へ、我が頭を懇ろに撫でさすつて慰めて、さて出て行つてしまはれたのである。

註

（一）アイヌの家は大きな爐を中心に主人の座席を右座、その向を左座また向座といひ、入口の側を下座（をんなわらべなどの席）、奥の側を横座また上座（常は明けておく神聖な席）といふ。

（二）アイヌの古俗、嬰兒は着物なしに裸形で育ち、常は爐ばたを這ひ廻して、時には灰いたづらをして、足など（時には尻たぶ半分ぐらゐ）灰まみれになつて育つてゐた。

（三）東奥にも見うける事で、嬰兒は、裸のまゝ、肌へぢかにおんぶをする。出し入れも簡單で、あたゝかでもある。

（四）たんと可愛がる意。あまり可愛がつて息をつくのも十分つけない程、心臓もその爲めに半分減つてしまふ程。

（五）アイヌ婦人は肌（殊に乳房）を人に見られるのが嚴肅な禁忌で、乳房が高くふくれて來る年頃から、特別の襯衣を着る。前がはだからぬ樣に縫ひ合せて裾から被つて着て、あとで首の根元まで、襟を左右から紐又はボタンで合せるもの。

第二段　客神（まらうどがみ）

それからは、いつも我がするわざの刺繍を取り出し、それに心を込めて我を忘れてゐた。はや晝下りも程過ぎた頃、ふと兄神の家に、どうした事か、人の笑ふ聲、話し聲が美しく響き、兄神がそれに應へて又笑ふ聲、話す聲が時ならず聞こえて來た。不思議に思つて居ると、姉神が入つて見えて云はれるのには、『御身を此處へ連れて來て、歸るとぢきに、一人の客神がうちへ見えた。その神の云はれるには、『我は西浦の神の家來だが、方々廻り歩いてゐるから、何處にえらい神が居て、何處にいくぢ無い神がゐるかを皆知つてる。今日は石狩を通つて此處まで來たが、此處には里

神が居られるので、憚ながら、たゞ暫くでも、神のみあらかに休んで、尊い神とお話がして見たい。徒然の折は今後また寄つて、神と四方山咄がしたいのだ、』と云つて見えた。兄神は非常に喜ばれ、『では二三日休んで下され。些少なりと酒を造つて、飲みながらゆつくりと咄を樂みたい』『いや唯一寸と思つて寄つたのを、それは有難い』兩方嬉しがつてしまつて、それから、兄神は私達に云ひつけて、うちで酒を造つた。處がどうも自分で西浦の神の下僕だと云はれるが、姿を見ようとすると、何だか靄の中に神々しい光りがきら〳〵ぴか〳〵して能く見られない神だ。どういふ素性のかたか、物言ふ聲、笑ふ聲が迚も美しいから、畏る〳〵仰ぐけれども靄の爲めに裾半分も見えない。たゞ聲を聞くだけでも、きつと御身も嬉しからうと思ふ。どうかすると、神の下僕などでは無く、えらい神が兄神をかつで居られるのかも知れない。西浦に、神の家來で、彼方・此方、國を廻るものがあるといふことはまだ知らない。だが、お蔭で酒を造つて、お酒が飲まれる。たゞ自分ひとり、神を見て御身に見せないのが可愛相だから、一寸知らせに來たのだ』と云つて出て行つた。

不思議なことに思つて二三日立つ。どういふかたであるのか、夜も晝も、話し聲笑ひ聲が家を透して聞こえてゐたが、夜になつて、姉神が、酒宴の裝束をして耳には耳環、胸には佩玉を垂らし、いとゞその顏が神々しく輝いて見えた。にこ〳〵し乍ら云ふ樣『兄神の申しつけには、西浦の神の家來と自ら云はれる重い神が遊びに來られ、酒宴を設けてゐるから、來て御身にも御酒を飲みなさいと申し付かつたのだ』と、聞いて羞かしく嬉しく姉神の背につゞいて兄神の家の敷居を跨ぎ、畏れ虔みながら入ると、下座へ姉神がわが手を取つて坐らせた。

兄神は酒宴の禮裝をしていゞゝ常にも增して美しい。手をのべて、下座の我が頭を懇ろに、久しく逢ひでもしなか

つたものゝ如く搔き撫でる。家いつぱいの男神・姫神の客が、横座に長い酒筵を張つてゐる。長る〳〵打見れば、行器(一)の眞後ろに、本當に叢雲をたちなびかせ、神光さん〳〵と輝く、その中から、神語と笑ひ聲と美しく響くのに感嘆した。姉神は、起つて宴席の間をあちこち立ち廻つて酌を取り、男神たちは樂しい酒を獻酬し、女神達は舞ふ、歌ふ、踊る。酒宴は今し酣である。

その時、行器の眞後ろから神の聲が美しく響いて、『いざや里神、少し願がある。御身の末の妹に、憚乍らたゞ一盞(二)をさしたい。神奴の身で盞をさすも失禮だが、たゞ一盞をさしては、惡からうか、好からうか。惡かつたら遠慮なく云つて下されたい』とあれば、兄神、から〳〵と打笑ひ、『これはしたり、昔から神でも人間でも、盞をさすことは禮儀な筈。何で私が否みませうぞ。たゞ有りがたいだけ。さあ〳〵一盞なり、二盞なり、三盞なり、下の妹に盞をさして下さい』と、事も無げにから〳〵と笑ふ。『如何さま、人間でも神でもする禮ではあるが、神奴の身で、里神の妹へ盞をさすこと憚あり、それで伺つた次第。有りがたう。では御言葉に任せ、見て居られる神々の前で、里神の妹へ盞を上げよう』云ひつゝ、やゝあつて再び神語が美しく響いて、『さあ里神の末の妹、失禮だが私の盞を受けて下さい。御身の聞かれたやうに、御身の兄神が承知の上だ。』云はれるまゝに、膝行して進む。見ると、行器の後ろから人間の手であらうか、神の手であらうか、餘り大きからぬ手が靄を纏うてあらはれ、大盞がわが頭上に徐ろに酒なみ〳〵と差し伸べられて居る。盞の上へ我身をかゞめて、畏まつて受け取り、高く捧げ低く捧げ、拜をして、少し飲んだあとは、自分の行器(三)へ土產に殘して、恭しく盞を返し、それから己が席へ歸つてすわるや否や、遙か遠い島山の上におどろおどろしい雷鳴がして、怖ろしい神の次第に寄せて來るけはひ、而も怒れる神の疾走して來るやう、その風がた

ちまちの内に、もう此の家の垣根にはた〳〵と鳴りざわめき立つた。

兄神、暫し耳傾けてにつこと笑ひ、黄金の鉢へ徐ろに酒を移しながら、我へ對つて云ふ様、『いざや我が妹、我は、祝の酒を釀したら、第一に幌尻の神を請じて正客に据ゑようと思つてゐたのであるが、今日の酒は唯ほんの食事代りに造つたさゝやかな酒ゆゑ、また幌尻の神を請待するには、これ式の酒ではいけない故、それ故遠慮をしたのであつたのに、やつて來ると見えた。此の酒は、飲みさしでもなければ、まだ何神へも掬んだのではない。(四)お前の家へ持つて歸つて、幌尻の神をこれで拜んで、そして御身が飲むがよい』云はれるまゝにすぐ起つて、その大きな金鉢を持つて我が家へ歸つた。

歸つて、酒を我が家の寶壇の前へ据ゑて、爐の火を搔き立てると、さゝやかな家の中が一度にぱつと明るくなつた。右座のわきに、拜跪して髪のさきを床にぢつと着けたまゝゐると、背戸へ落雷の音がした。忽ち取り佩く太刀の鍔の鳴る音がして入口へ猛き神の廻つて來るけはひ、やがて、簀を垂らした戸を引きちぎつてかなぐり棄てた。我が垂れ下つた前髪越におづ〳〵見て見ると、かうあらうとは思ひも寄らぬ小さな身柄に、きつい顔、きつい面ざし、目は小さな星を二つ竝べて置いた様、錦襴の小袖を無雙に着た上へ、神刀を帶にぐつと差し、顔つきぷり〳〵して、入るや否、右座の我を見守り、見据ゑ、段々目を俯せて、その内に面色土の如くに變り、口を結んで死んだものゝ様にだまり、段々きつい目つきになつて、右座へ上りかけて、止め、左座の方へ、床もとゞろに足音荒く蹈み上り、横座へ行つて哄とすわる音があたりを鳴りとよもした。すわるや否や、我に打向ひ、顔を和げて云ふ様、『いざや里神の妹、今宵は里神かたに酒宴があつたらう。御身も呼ばれて行つたらう。少しでも御身が土産に殘して來はしなかつたか。何

ぞ土産酒があつたら、出して飲ましておくれ』云ふに、ほつとして直ぐ起ち上り、折敷の上に黄金の盞・黄金の酒箸を載せて、件の金鉢と一緒に差出し、恭しく黄金の盞を捧げると、差出した我が手の先から受け取るまゝに、大盞の上に渡した酒箸を漂はすばかりに酒を注ぎ、それから我が座へ復して坐るや遲し、幌尻の神、その盞を上の梁を目掛けて微塵になれと打ちつけた。さしもの大盞も粉な〳〵になつてぱつと落ち散らばる。幌尻神颯と起ち上り、我が頭の毛をぐいと掴み、聲を荒らげて、『淺間しや、疎ましや、里神の妹の阿魔、これ迄、又なき美女、世になき賢し女と、思つたからこそ幾山川を隔てゝ待ち望んで居たのだ。だからこそ、離れてゐても仇し心を互に有たず、清い肌身を矜る我等だつたのだ。それなのに、我がまだ、言葉さへ息さへ掛けずに居る間に、どこのをこ者、西浦の神の下僕・下郎などに、善い神でもあるやうに、態々酒を造つて引き留める里神、我には告げもせず、請じもせず。下郎が毎日居浸りに居て、女と、たゞ子を孕み設けぬまでにたはれ合ひ、笑み交はし、互に飲みさしを飲ませ合ひ、あの下郎と御身との涎まみれ・痰まみれになつた酒を、誰が飲むと思つて、命の惜しいものが、こんなことをしてゐるか。どんなことを御身達がするとも、諸共に萬に一つも助かつて居れると思ふな』さう云ひながら、我を振りまはして、柱へ梁へ我を撃ちつけた。我はそのまゝ絶え入つた。それでも飽きずに、太刀を引抜いて滅多斬りに斬りさいなんだ。我は痛いといふ物の味の此が知り初めだ。我が傷の頭から、我が傷の末から、朱の血の川が流れ下り、傷の頭、傷の末、一度に樺の皮の燒きちゞれるやうに痛む。痛さで我に歸つて、『兄さん』『怖い！』我泣きまろび、幌尻の神の手の下から、手の上から、柔い蔓のやうに我なよ〳〵と逃げかはしつゝ氣も轉倒して泣きながら云ふには、『幌尻の神、御身は神なれば、何でも照覽あるべきに、孕まぬばかりにたはれたとは餘りだ。のみならずどうしてこんなに斬りさいな

まれることか。待つて下さい。たゞ一盞の酒を兄神が許して我が受けたばかりに、かう云はれようか』云へば幌尻神、『何を云ふぞ。たはけて置いてその上に欺かうとするか。黒神も、神だと自ら威張つて居ながら汚いことを手傳つてやるとは怪しからぬ』と、我を更に外へ投げて地面へ打ちつけ蹈みにじる。氣も遠くなつて見るものが二つに見えて來、三つに見えて來て、それから後はどうしたか、されたか覺えが無い。眠つてゐたか、死んでゐたか、我に返つた時には、背戸の土の上に、夜更けの月の影の下に、血のりの沼の中に漂うてゐた。着る物が切り裂かれて繩束のやうに身の周りに落ち散らばつてゐた。うら若い乙女子の肌の、夜陰ではあれ、あるまじき樣を口惜しく惱むに、氣も心も遠くなつて、眞つ暗な岸の穴の底深く倒まに落ち込む樣に覺えて眠つたものか、死んだものか、そのまゝあとがわからなかつた。

註

（一）行器は酒をなみ〳〵と盛つて主・客の間に置かれる。正賓を、行器の向うにすわらせて一座居流れるから、行器の眞後ろはこの日の正賓の意がある。

（二）盞はアイヌでは、日本の昔の春附の大椀である。大椀の酒に口をつけて餘りをその座の婦人に差して與へる。之をパケシと云ふ。「口の末」卽ち「飲み差し」の意味で、差されたものは再拜・三拜して受けるものである。

（三）小さな行器を用意して居て、女はその場で皆飲まずに、それへあけて歸りにみやげに家へ持つて歸るものである。

（四）酒槽から新しく掬んだ酒であつて決して、他の神へさゝげた餘りの酒ではない意。

第三段　誓の條

それから、どれ程時が經つことであらう。もの〳〵しい聲が、時ありて我を醒ました。どこが傷つき、どこが痛ん

だのであつたか、それも拭つた樣にあとかたなく、息をつくのも延び〳〵として不思議な思ひをしながら目を明けた。思ひきや、我が家の中に高枕をかひ、刺繡の着物を着せられて、傷も痛手も元の軀に回復して、圍爐裡火が燃えてゐた。良い藥も飲まされたものとおぼしく、枕元には藥鍋も藥椀も置いてある。酒宴のあつた兄神の家には、もう何の聲々も無く、たゞ一人だけの酒歌が、神の昇天の樣に美しく響いてゐて、我はその聲によみ返つたのであつた。其の歌聲は、家を透して昇り、高窓を超えて昇り、昇り昇つて天上にわかれて、半分は青雲を透して天の最高層へ達した時に、歌のゆく先き〳〵、威き神も、たゞの神もそれに合せて舞踏するのが、音もとゞろに響き聞こえる。半分は取つて返して人間界へ降り、降り降つて黑土を透して冥界へ入る音がおどろ〳〵しく響き聞こえた。歌のゆく先々には、また神々だか、惡魔だかが踊り狂ふ音、夜見の國を鳴りとよもした。さういふ音がして、そのあと忽ち空打霽れてもう何の音も無い。それと共にあの屋內の神の歌聲も止んでしまつた。我は驚嘆を禁じ得ず、一體誰——神か、人か、あの歌聲の主は？　段々思ひ出して來ると、一體何神であつたらうか、旅の序でに立ち寄つて、あさましい幌尻の神、襁褓の中から行く末を約して育てられ、蔭ながらこの身を無垢に守つて今に至つたものを、聞いたことも無いこと、何の「たはれ」呼ばはり。跡方も無い强い言に恥ぢしめて、剩へ慘たらしいさいなみ樣。祖母より傳へた、母より貰つた、乙女の肌を曝させられ、何人が助けに見えたのか。恥かしい。本當に、西浦の神の家來と名乘られたかたが、どういふ素性のかたであらう。そよとも姿を見せ給はず、聲ばかり、言葉ばかりを聞くだけに、その一盞をば、兄神の許の下に受けたのを、幌尻神の根に持つて責め殺すにも、あのやうなひどいやり方、まゝよ自分で縊れて死んでしまはうか、と思へば、西浦の神を、一目も見ずじまひになるのが悲しく、泣けて、泣けて、心に占つて、あの神の元

をあちら・こちらの里に求めて見るが、少しも解らないのが不思議でならない。

其の時、家の側に人の歩く足音が急いでやつて來た。女子だつたら其の様なけはひがするであらうに、男とおぼしく、刀の鍔の音がガチャリとして、土間を入つて來る。怖い。どんな人であらう、大きく咳拂(一)の音がして良い香がする。垂らしてある帳(たばり)をするりと風の様にそよがすと見る間に、叢雲が立ち迷うて、靄の小山が光りを射して動いて來るやう。やつぱり彼の神の家來と名乘る神らしい。左座へ歩み進んで正面へ坐る音が鏘然と鳴り響いた。畏(かしこ)さに、臥(二)床を下りて後へに臥床を押しやり、爐ばたへにじり出で、立ちこもる靄のその中へ我と我が身を入れて恭しく坐り、頭を下げて前髪の端を疊へぴたりと着けたまゝ、我は忍び音にすゝり泣いた。暫くして泣き止み、おづ〳〵と髪の隙からそつと眼を向けて見てみるに、立ち罩めてゐる靄をかき分けて、二度・三度は人間の姿を見ることが出來なかつたが、久しくさうしてゐる内に、驚いた——その言葉に、その笑聲に、又その歌聲に、大人の人かと思へばさうは無くして、まだうら若い人、錦襴の小袖を無雙に重ね、錦襴の胸の上と裾の上には、ぐるつと黄金の平金を纏ひ、平金の上、金絲の唐草長くうねり短くうねり、その面て黄金の光さんらんとして、美丈の黄金の帶を腰に卷き、神劍を鞘長にぐつと反らして帶に差したその手元腰元のいかめしさ。黄金の蓋(かさ)を、紐の緒强く顎に詰め、蓋の緣かけて差し覗く神々しい顏ばせは、今しも差し出づる日輪のかゞやかさ。但し、悲しい色をあり〳〵面てに浮べて、何時迄も何時迄も一つ處に目を据ゑてゐる。兄神の美しさを今迄どこ探しても無いものにきめてゐたことであつたのに、此はまた天上の神の一夜に地上へ降つたやう、さら〳〵、神の家來では無ささう、勇者と覺えて、眞勇の風貌が自づと別人である。

長い間、さうやつて居て、神人はじめて口を開いて、『いでや里神の妹、我がいふ言葉をよく聞いてくれ。さぞ御身は我を恨んで居よう。併し御身は女神であるから、よく我が心を見るだらう。(三) 我は、御身と幌尻神が約婚のあることを知らずに、唯〻一盞を御身に差した。幌尻神はそれを妬ましく思つたのなら、唯〻口で云つても解つたのに、我が爲にひどい憂き目を見せたのは可愛相だ。それで我が力を以て御身を癒やしたのだ。一盞の故に怒つて幌尻の神が汝を殺してから、我は、天上の神戰に喚ばれた。(四) それ丈でも無事に通れるか、どうか解らないのに、地下の魔神の冥界の國へも喚ばれてゐる。賤しけれど我も男子の端くれである。喚ばれて、神の國であらうと魔の國であらうと、たじろいでは、生きてゐる間の恥辱である。だから承知をした。だから我が高らかにやつた歌聲を御身も聞いたであらう、歌の行く先々に神々も惡魔共も踊つたのだ。此から天上の神の戰に先づ赴いて、それから、若し生きて返つたら冥界へ入らうとする。天上の戰は大丈夫だが、若しかすると冥界の魔神の戰は、生きて返れぬかも知れない。だから一言でもよいから御身の言葉を聞き、我も云ひ、それから出來ることなら、一口でも御身の手で煮たものを食べて行きたい。それで寄つたのだ。若し冥界で殺されたら、一年立つても二年經つても背戸を訪れないだらう。さすれば今から後は逢ふことも出來ない。我が死にでもした時は、どうか克く幌尻の神に仕へて仲よくしてくれ。下僕の裔、下司の身の我でも、若人の思ひ若人の情は、神でも人間でも知らぬものはないだらう、だから、縱令いくさの間にも、戰の隙にも、御身をば忘れ兼ねる。一口の飲みさし故に死にに行く前に、思ふことを皆御身に話して、せめて共ばかりでも、戰の勇み力(五)に持つて行くのだ。少しでも御身が我をかなしと思はゞ、たとひ道は遠くとも、我が背後に祈つてゐてくれ。では、すこやかに、暖かにして居ておくれ』

云ひ終ると共に、はや高窗をふつと跳り出た。まだ一言の端をも我が言はないのに、たゞ見るだけ、たゞ聞くだけになつてしまふであらうか。我泣きながら言ふ樣、『西浦の神、申すことがあります。しばし待ちたまへ。わたしとても一言、物思ふ胸を申したい。わたし故に世に恐ろしい戰に出で給ふことのかなしさ。御身が死なばわたしも死ぬ』泣き叫べば、思ひきや、どこかで聞いてでもおはした樣に、高窗から神なる君が樫の實の落ちこぼれる樣にころがり入りて、我が肩を抑へ、『吾妹(わぎも)(六)よ、吾肝(わぎも)よ』云ひつゝ我を撫でさすり、我が頭を撫で給ふ。『よく言つてくれた。我死なば御身も死ぬとは。さあ〳〵、御身の云ひ度い事を、戰ひの首途に皆云つて呉れ。御身の言葉を皆、戰の勇み力に持つて行く』と云はれるから、畏る〳〵泣きながら、云ふ言葉も途切れ〳〵に、『若い童女で我ある故、何事も兄神のいふことを唯〻聞くばかり、一盞の飲みさしも、兄神の許しで受けたのに、幌尻の神が怒つて、殺すにも有られもないこと、若い乙女・若いをんなで我あれば、大事に護る純い肌、純い胸乳、祖母(七)のふところ・母のふところを、おぞや、あらはにされて、西浦の神のお蔭で生きは生きたれど、肌身を見せまゐらせた上からは(八)、拙くても、神の尊の裳(九)裾の末に侍し、破れ蓆の御足にひきからまる許り(一〇)のことながら、せめては水汲み、薪を拾ふばかりも仕へまつることがかなへば、死んでの後まで嬉しう存じます。若き童女の身の、神の御側に入るも恥かしく、誠には、縊れて死に度く思ひましても、一目西浦の神の御顏を見ずに死ぬことの名殘惜しく、どうして好いか、生かして頂いたことが却つて恨めしくなりました。其處へいらして下さつて、畏る〳〵好(よ)うく、見まつりもし、伺ひもして、悉皆(すつかり)解りました。かういふ君を見奉りましたからは、世界廣しとも、私のつかへまつる神は唯〻一つも外にはありませぬ』長々と我がいふ事を、暫しは息をもせずに聞いて居られた神の尊は、彈き弓の彈かるゝ樣に雙腕を開いた胸を我に投げ、赤子を

抱へる様に、子供を懐く様に我をしかと抱き緊めて我が額の上へ接吻し給ふ。『姫神よ、我を愛する言葉、ありがたう。此の言葉を戰の勇み力に持つて奮ひ戰はう。我死なば御身も死ぬと御身が云ふか。それなら、一層御身を連れて戰に行かう』云ひつゝ我をいだき撫で給ふ。我も『背の君』と叫んで神の尊の裳の裾へ取り縋つた。

註

（一）家をおとづれる禮。入る前に、入口に立つて必ずまづ長く咳一咳するのである。

（二）善い身分の者は爐ばたの座席に、低い臺を置いて、常住その上に坐してゐる。アムセツといふ物。その上へ病臥してゐたのであらう。だから、下りてそれを後方へ押しやつたのであらう。

（三）アイヌでは、女は、みな巫女だつたから。女だから巫で皆見拔いて知つてるだらうの意。

（四）何の意かわからないが、アイヌの古俗、姦通は最も重い贖（あがなひ）を科せられた。大勢に取り込められた中で棍棒（儀式に造つてあつて、戰の武器にも用ゐられたもの）で背をなぐられるウカラといふ制裁や、鼻を削られて追放されるなど。素尊の追放も贖ひであつた、その様に、夜見の國へやられる所まで、こゝも贖ひの形式が、かういふ形に物語化したものであらう。

（五）原語はツミテクツム（いくさの力）、乳母が自害して、『此を戰の力に持つて仇を討つて來い』と勵ますこともある。所謂戰の首途の血祭といふことの意味などを思ふ。又かやうにやさしい女性の思ひを戰の力に持つといふこともある。妹の毛髮を旅の首途に持つて行く沖繩の風習などを思ひ浮べる。

（六）原語シャンベは、心臟のことであるが、常に、邦語ではキモと譯して云つてゐる。アイヌでも、愛人をシャンベ卽ち heart と呼びかける習があるのである。

（七）祖母といふことは、親の母のみならず女系の祖を皆含めていふ。アイヌでは、男子の系圖は男系のみをいふやうに、女

子については、親をいふ時女系をのみいふ。男は男親の血を引き、女は女親の血を引くといふ考へ方である。祖先崇拜であるから、大事なことにすぐに祖先を引合にする。女は肌を大事にする語に、いつでも祖母のふところ（肌のこと、特に乳房のこと）を云々と云ひ出すのである。母のふところと云ひ重ねてあるのは互文の綾で別に外の意味があるのではない。

（八）女は絶對に人の前に肌（特に乳房）を出さない。唯一の例外は夫である。だから、肌を見られると、その男のものにならなければならなかつた古代信仰（たとひ天女でも、漁師の妻にさへ。それで羽衣傳説のモーチーフが生れる）が、ちよつと茲に顔をのぞかしてゐる。

（九）妻になるといふことの修辭。

（一〇）夫が敵と戰ふ時に、妻には何の手傳ひも出來ぬ。せめて、破れ蓆であれば、敵がそれへ足をひつかけてあぶなつかしくしてやられる。妻が夫を扶ける謙辭。但し、此の條には、少し意味が變つて、却つて御邪魔をするやうなものであるといふ謙辭に使はれてゐる。

第四段　天國行の條

去る程に天上の戰に出で立たうとする西浦の神は、切りに手を以て我を撫でさすり、揉みかへし給ふ。いぶかしくなつて振返つて見ると、かゝるべしとは思ひきや、神の尊の手の内に、太刀の手上（たがみ）の黄金の雌眼（一）と我成り果てゝ、その金色の光が、我が小さな家の中を明るく照り渡つてゐた。

茲に至りて、高窻を打ち透して出で、里の神なる兄神の家の眞上で身を搖りながら、大聲に呼んで（此處、大要を摘む）出で立つ會釋と、妹を連れゆくこととを、ことあげをして天空へ舞ひ上る。その音諸天も崩れ落ちるかと怪まれる。『戰に連れて行くとて、人間のまゝで連れて行かれるのであつたら、せめて一人でも斬つて手傳ふのに』と口

惜しく、我は、どうにかしようと身をもがけば、神の尊は手で抑へ抑へしてたゞひた登りに天に登つて行く。雲居の空を六重打透し、星居の空を六重打透せば、天門が晴やかに見え渡る。門の兩側を三人づゝの奉行(二)が守つてゐて云ふ事には、『西浦の神、石狩神の奴隷神といふから、荒くれ者だらうと思つたら、何だまだ小童ではないか。こんな奴隷があるものか。まるで我等の方の拜む神が地上へ降つたやうな神だ。幌尻の神の妻を竊んで、怖ろしい戰を仕向けられるさうだが不憫なものだ。一人の童がどうして、そんな戰にたまるものか』と半數が云へば、半數は、『女の子は贏ち得た小悴の戰には脆く、か！　アハハハ』と笑つたのもある。神の尊大に怒り、刀を拔いて振ると見れば、六人の神は木端微塵に飛んで、お汁の實をはッ散らすに異ならず。門を入ると、天國の町がずうと立ち竝ぶ。どういふ敵を討つとて出かけて來た人數であらうぞ、さながら蟲の湧く樣な夥しさ、物の具に身を固めたてあひが押し合ひ擠し合つてゐる。幌尻の神が大聲に『さあ女盜人の駈落ち者が來た。疾く斬れ、早く殺してしまへ』と手を高く差し伸べて云ひつけてゐる。

大勢の向、はるかに雲の橋がかゝり、橋の上には見物の神々、威き者、弱き者、夥しい群が坐つてゐ、小手打翳して『何だ、大人かと思つたらこまかい童だな、赤坊の樣なものだ。だが女を取つただけあつて好い男だ。』『幌尻の女を奪つたんでは强いだらう』と口々に云つてゐる。神の尊はそれらの言葉に耳を藉さず、刀を拔いて切つて廻る。我も、せめて一人でも斬つて少しも休まして上げたく思へど、仕樣も無い。

併し、(以下大要)最後には見物の神々が止め役に出で、天上の戰は、豫言通りに勝いくさに終つて、神々をあやまらして、西浦の神が引きあげるまで、實に長々と敍述があるが今はページ數が無いので省略に附しておく。

註

（一）雌眼・雄眼といふのは鋲（びやう）のこと、アイヌは之を器物の目（shik）と呼んでゐる。愛人を刀の鋲に化して戰ふ話は、そのまゝ日高のエテアンマの傳承にもあることである。第六段蘇生の條の同じことばも、爐緣の金の鋲である。

（二）原語プンキョーは、多分國語の奉行、卽ち松前奉行・蝦夷奉行などからはひつたアイヌ語であらう。

第五段　冥界行の條

さてそれより、西浦の人は、魚の引き返すさながらに、取つて返して天門を出で、ひた降りに降る其の音轟々として國土も村里も崩れるばかりである。それに憑神の起す神風は、風先に大粒の雨、大粒の霰を伴つてバラ〳〵と降らし、林をうつ風鳴りはためき、地面をうつ風鳴りとよみ、人間世界は搖籃の搖れるに異ならず。神の尊は夜も日も戰ひて勞れも知らず手も負はず、我は唯〻刀の雌眼になつて、走り血の生血・惡血の匂に咽せ返つて、息も止まり、氣も遠くなる。やがて、里の兄神の家の上に、體を搖つて大聲に會釋し、『微傷も負はずに歸つたぞ、これから更に冥界へ赴く所であるが、惡魔が澤山住むであらうから、歸りが幾月・幾歲かゝるか解らない。又殺されてしまふかも知れない。生きて歸つたら又訪ねよう。何時までも音が無かつたら、冥界の底で二人が死んだと思つてくれ、その時はせめて酒糟ばかりも手向けて下さるであらう。』云ひ終るや、黑土の面てへ、頭を眞先に突込んで、ひた下りに下り行く音、國土の底を鳴りとよもす。音に聞く冥界の小川の流れ下る樣けざやかに見え渡る。川の兩側には、大きな塚、小さな塚が澤山竝んでそれが何處迄も何處までも續いてゐる。その上で、神の尊が體をゆすつて、かう云つた。『さあ、冥界にゐる神々だか魔神だか、喚ばれるまゝに推參したぞ。起きてかゝつて來い』云ふと、塚がむく〳〵と起き

て追ひ掛けて來た。何物であらう、人の形はして、男の姿をした者は、頭は蚊の様、絲筋ばかりを止める襤褸を下げたものが、土の様な顏色の所々が黑く斑らな斑を成し、幅廣の槍に毒の弓、毒の矢を持つて、見渡すかぎり何處迄も何處迄も現はれて來る。惡臭が烈風の様に後ろから追つて來て、肝がしらも肝の末も痲れてしまふ。女の姿をした者は、頭は破れた叺の様、體ぢゆうによれ〳〵の襤褸を下げて房の様にゆら〳〵させ、毒の餅を毒の蕁麻繩かけて背負つたもの共、何處迄も何處迄もむく〳〵と現はれ出でゝ追ひかけて來る。その聲は蚊の鳴く様に入り亂れて喧しい。

さすが神の尊も、(大要を摘む)この魔軍には散々に苦まされ、大勢をいつぱいに殺しながら終に仆れ伏す。太刀の手上に雌眼となつて嵌め込まれてゐる我の魂も、毒に惱んで針の目程の幽かな意識になつてしまひ、終にすつかり何もわからずなつてしまつた。

註

(一) 原語はサラニプ、木の皮(ニカプ)や草の纖維を縒つて、絲にして編んだ籠、或は寧ろ袋、山などへ持つて行くもの、こはばつてゐるから、立てればぐにやりとしながらも立つ、冥界の幽鬼がその様な頭をしてゐたと。

(二) 原語はトッタ、大形のもので、穀類・豆類などを入れて、藏に納めて置く叺様の囊。この方が一層無氣味さうである。

第六段 蘇生の條

此の條が一等神祕的で一等長い。やはり里神の妹の自敍體に、「我が意識を回復した時には」と云つて、神の尊の現無き骸が、仆れさうな重い足取りで、シシリムカの己が山城へ歸りつく所を敍して始まる。玆に神の尊が太刀の柄から我を取り逃して靜かに左座へ寢かし、『我が使ふ神々達!』と呼びかけて、祈り祈れば、爐緣の六つの雄眼、六つの

雌眼が、兩方から相寄つて金の觸れ合ふ音がして忽ち六人づゝの小さな雄神・雌神と成り、座敷の上で蹈舞をして祈りを擧げ、アイヌのする通りの儀式をすることが細々と敍述してあつて、結局二人が元氣に蘇生すると共に、小さい神達は、又もとの爐緣の黃金の鋲となつてぴか〳〵と光る。一體この西浦の神とは何神であつたらうかと、よく〳〵家の中を妹神が振返つて眺め、打ち驚くのは、(言葉を極めて屋內の莊嚴を敍した最後に)裾に火の燃える赤織の厚司、鞘尻の火が燃えてゐる太刀を見て、始めて、此の世に、神も人も及ぶものなき英雄のアイヌラックル・オイナカムイであつたことを發見するのである。

姫神は驚嘆し、且つ畏れ憚り、何故に神の尊が、その裝束を着けて居られたら判つたのに、態と西浦の神など名乘られるものだから、人からもさう嘲られ、我さへ今までもさうお呼びしてゐた勿體なさと、あやまれば、神の尊、『否、我が常の裝束だつたら却つて危かつたのだ。常の着物で身輕に働いたから好かつたのである。加之、この度の戰には、全く御身の蔭で助かつた。御身を戰の力にもち、わが揮る太刀の柄の上に御身がゐることをば、神も惡魔も知らなかつたから助かつたので、この後見の魂が無かつたら、助からなかつたに違ひない。兄神は心配して居られようと思ふから、行つて我等の無事に歸つたことを御知らせするがよい。我も早かれ遲かれ、兄神を訪ふであらう。熊や鹿の肉の良い所を持つて行つて上げるがよい』と大きな家苞を作り給ふ。卽ち其を擔ひて我出で立てば、神の尊は背戸まで送り出で、外の櫓の上に立ち、あの支山を一つ廻れば、ぢきだと指し給ふ方へ、驚きつゝ就いて下り、あと振返れば、櫓の上なる神の尊は、無くなる程首を振つて數多度頷き給ふ。橫山の鼻一つ廻れば、思ひきや、我が住んでゐた山城の、孤丘の上に建つてゐる樣が高々と見えて來た。急に悲しい心が起り、あとを振返ると、今は幽かに神の尊の家の

横山の頂が、立ち罩むる靄打ち靡きて見えずなつた。

註

（一）此はオイナカムイ・アイヌラックルの缺くべからざる形容詞のやうになつてゐる常套語で、この神の表衣も、太刀も、下の方からいつも火がぽつぽと燃えてゐたと傳へられてゐる。火神の子だからである。

（二）赤織の厚司は、原語ニカプアツトシで、ニカプは春楡（赤だも）のこと、アイヌの火の木で、火燧臼・火燧杵を造る木。この木の皮の纖維から又衣服が出來る。卽ちニカプアツトシである。此はオイナカムイのハヨクペ（鎧）だとも表衣だともいはれる。

第七段　いたづきの條

里神の兄と姉とが、心痛の餘りに痩せて、物も食べずに衰へてゐる所へ、數多の好き土産を齎らして無事に妹が歸つて來るので又すつかり元氣になつてしまふ。一部始終を委しく妹の口から話して、始めてそれと知る驚きと喜び、里神に、數々の思ひ當る節々の咏歎などが委しくあつて、兎もあれ再び例の平穩な生活に戻り、兄神は刀の鞘の彫刻に餘念なく、姉妹はいつも刺繡に沒頭した。妹はしかし、刺繡をするとては幌尻の神をと云つて、針突き通し、針刺し貫き、歩く時には、敷物を幌尻にして憎らしいと足に力を入れて蹈み、煮物をするとては、汁の肉を幌尻にして、杓子（一）で粉にし、しやもじで打ち碎き、箆（二）もて叩く。毎日さうしてゐたが、アイヌラックルの神雄を偲べば、何をする力も痲れてしまひ、涙のみ流れて止まず、遂に食物も喉を通らぬやうに病み臥してしまふ。

註

（一）カシュプ、汁を裝ふもの。

（二）ペラ、飯を裝ふもの。

第八段　おとづれの條

妹神が力なく床についてゐる。ふと寢ながら、沖の方から鳥の聲とも神の聲とも分らない美しい聲を聞くが、兄や姉にはそれが聞こえない。起きてひとり浦に出て見る。そこから浦の敍景になつて、最後に沖の雲間に白帆を擧げた小さな金色の辨財船が見えて來る。オイナカムイの家で見た彼の六人の小さな神が櫂を漕いで來るのが見える。段々近づく樣を美しく敍述して、其はオイナカムイの待ちに待つた來訪であつた。オイナカムイは其後わざ〳〵ウイマム（一）に出かけて新しい酒や穀物や數々の和國の土產を滿載してこゝを訪れたのであつた。兄の里神とオイナカムイと改めて名乘つて盛大な宴を開き、ゆつくり歡を盡すその席へ、大勢の神々と共に、やはり幌尻の神をも請待して今度は痛快に復讐をし、六重の地獄の底まで蹴落（二）してしまふことを委しく敍する。

註

（一）昔の蝦夷の酋長は、松前藩主の代替はりに遙々船を仕立てゝ方物を滿載して朝覲の禮を執つた。これが段々、物々交換の恆例になつて、部落に米・酒が切れると、熊皮・熊膽などを土產に松前へ來て獻上し、反禮に米・酒を土產に貰つて歸村した、稱して、ウイマムといふ。アイヌ傳說の中には、天神などまでウイマムに行くものゝ如く物語られてゐるのは、自分達の生活を、神にまで反映さしたのである。かうして、オイナカムイまで、日本へ朝貢するやうな話になつて來るのである。

（二）「神」の屬性には、殘虐もその一つで、怒れば、ひどい事もされるし、かうして妻盜みさへもされるのは、今人の神の考とはちがふのである。

第九段　結婚の條

愈〻改めて里神の許から、嫁入りをする。結婚の古俗を繪卷を繰る樣に詳しく敍して、三々九度にあたる合巹の食事の式を擧げて樂しく同棲し、オイナカムイが、さながら今のアイヌのやうに、時々山へ入つては熊を狩りして舅の方へ好い福分けをする、申分のない平和な暮らしで日出度く大團圓となるのである。

結　論　アイヌ文學と「小傳」

現存するアイヌの概數一萬六千人、內一割は樺太の南半に居住し、九割は北海道に住む。その內、根室沖の色丹島に、以前の所謂千島アイヌの殘蘖が、半ばロシア人化しつゝ僅に四五十人ほど生き殘つて居る。文學を存しない此の千島方言は別として、北海道のアイヌ方言は、樺太方言との差、僅かに一步、日常の對話はやゝ通話の困難を感じるけれども、雅語に於ては案外によく通じ、地名の語彙に至つては殆んど相違を見ない。北海道アイヌ語の內には、南に太平洋を受ける日高・膽振が南部方言を形造り、北見・天鹽・石狩・十勝・釧路・根室地方が北部方言を構成する。我が奧羽の地方に蟠居した昔の蝦夷と一衣帶水を隔つのみなる所謂口蝦夷地方、渡島（並に後志）のアイヌ語は、所謂南部方言よりは却つて石狩・天鹽の濱續きを以て寧ろ北部方言に近く、これが膽振の火山灣沿岸地方に及び、位置は北海道の最南部にありながら、却つて所謂南部方言とはやゝ差があつて、小さく口蝦夷方言を形成する。思ふに、南部方言の日高地方は、寧ろ永く所謂東蝦夷の地に僻在して、靜かにアイヌ文化を醞釀し、搔き亂されずに之を守つてゐたものである。そして、東蝦夷の更に奧の十勝・釧路の地方はどうかといふに、北の方、樺太を經て、宗谷より入り來る大陸のツングース族の文化の浸潤が、濱續きに、一方は西岸天鹽・石狩に滲透し、一方は北見の北岸を傳つ

て南下すると共に、石狩の平野は、石狩川の水源から中央分水嶺を越えて十勝川に沿うて十勝の平野へ交通を有したものであつたので、これがために北海道の東陲が却つて北部方言の色に染まつたのである。

之に反して日高は、十勝のすぐ手前に位しながら、十勝との境は北海道の脊椎を成し、その海岸は襟裳岬の天嶮に阻まれて、文化の流がこゝに堰き止められたが爲に、山懐に抱かれた一つの行き止りを形成し、南に海を控へて和かな氣候と肥沃な地味に惠まれ、早く農耕の道をも啓き、他の侵略を避け得て、比較的純粹な土俗を護りはぐゝみ得た。又これに反して極寒の北部地方、並びに天鹽・石狩の西岸地方は、固有文化の成熟の淺きに加へて、その位置、異族南下の衝路にあたり外來文化の不斷の影響下に曝されてあつたのである。日蝦夷地方は、それに加ふるに南方よりする日本文化の浸潤を受け、最も早く開けて從つて早く固有のものを失つたのである。

されば今日、言語といはず土俗といはず、最も純なるアイヌ文化の代表的なものは、南部方言區に屬する日高及び膽振の地方に求むべく、從つて、アイヌ文學の精髄も主としてこの地方に發露してゐるのを見る所以である。

英雄のユーカラのいくさ物語の舞臺が西海岸の地方であるのに對して、神々のユーカラのヒーロー、オイナカムイの活動の舞臺は日高の沙流川の流域である。今平取村の上のはづれ、沙流川に臨んだ丘陵、丁度そこに義經神社が建つハイ・ピラの地が、人祖アイヌラックルの墟址と傳へられ、アイヌのジェルサレムの地となつてゐる所である。アイヌラックルの又の名オキクルミを以て義經と做した邦人がこゝに義經神社を祭祀した所以もこゝにある。

アイヌの宗教神話のヒーローが日高を中心として展開し、アイヌの英雄說話のヒーローが、異族南下の衝路にあたる、攻防爭亂逞のなかつた西岸地方を舞臺として發生してゐるのは考へられがたい事では無い。

そして、膽振の東部、室蘭北東の地方は、太平洋に南面する日高の同じ濱續きで、今の登別・幌別の地方までは、日高の沙流のアイヌと同じ祖先を分けて分布してゐることが、その傳說に今尙物語られて、互に同系の故舊であるといふ感情がまだはつきり生きて動いてるのである。だからこの地方一帶に、もと同じ傳承があつて相分れて今日のアイヌ文學を共通に有してゐるのである。

今日高と膽振の兩者を比較してみるに、日高は保存に於て優り、膽振は進化に於て一歩の長がある。殊に前揭『小傳』の如きものに至つては、日高では純粹な古調で簡古と素樸さに於て勝れるが、膽振の所傳は言葉は碎けてやゝ長きに失する憾みはあるけれども、委曲を盡して痒い所に手の屆く樣な敍述であり、殊に新しい時代の發達した道義觀念が要所要所を緊めくゝつてゐる。此等は傳承者その人々の文化の差が作つた開きであらう。此の意味に於て、文學的に膽振は日高の上に一歩を進めて來たと云つてよい。

巫女の神語が、神のシノッチャの形を取つて生れ、傳承せられて、數々の神々のユーカラを醞釀し、その高潮オイナにまで發達し、一轉、英雄の物語に換骨奪胎されて種々なる人間のユーカラが文學的に分生したが、併しオイナの傳承も、文化の向上につれて漸くその形をみがき、膽振の『小傳』の物語まで來ると、寧ろ拙いユーカラよりは、も少し文學的に進出してしまつた。これが卽ち前揭の『西浦の神』の物語の一篇である。

然し乍、オイナは依然としてアイヌの聖經であつて、この種族の宗教的說話であり、純然たる藝術的作品ではない。勿論、英雄のユーカラにしても、この種族の人々に取つてはまだ全然信仰から獨立した藝術品ではない。そこが原始文學の本質であつて、この中に藝術的價値を見出さうと豫期したなら、失望を以て酬いられる以外の結果は生じない。

けれども之を文學の史的・發生的興味から眺める時に、こんな小篇の中からでも、遺られてゐた人類の様々な記憶のよみがへつて來るものがある。例へば人祖アイヌラックルが、天地の諸神を優越する威力の領有者であつたこと、神よりも人がえらかつた、さういふ古代思想の神の觀念が明瞭に露出してゐること、その神よりも偉大な讃仰の的に立つアイヌラックルをして、人妻を盗ませて少しも意に介しない、最上の理想神は、偉大なるが故に偉大で、怒る時には殘虐そのものにもなる烈火の威、寧ろ、(折口氏の所謂)仁慈と共に殘虐そのものも亦これを偉大者の屬性の一つに包容さしてその前にひれ伏す以外に何等それに對する批評が向けられなかつたのである。

其外、英雄をして天國及び地獄入をさせるホメロス以來の型、我國では義經・朝比奈をして演じさせる物語の型が、依然として、オイナカムイの役割にアイヌではなつてゐた。刀の鋲に魂を鏤めて戰ふ英雄の命の力を、魔神共が誰一人その發源所について知るものがなかつたお蔭で命を拾つて戻る物語の條には、極めて古くして且つ普遍的な、人類の Life Index の思想がほの見えてゐる、等々、アイヌ文學は尙、かういふ見地から、その固有の位置に据ゑられて正視せらるべき無限の資料を提供するものがある。

昭和七年二月十日印刷
昭和七年二月十五日發行

岩波講座 日本文學
第九回配本

東京市神田區一ツ橋通
編輯兼發行
印刷者 岩波茂雄

東京市神田區錦町
印刷所 精興社

大森製本

發行所 東京神田一ツ橋通 岩波書店

版權所有

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02954 7387

PL
495
K5.5